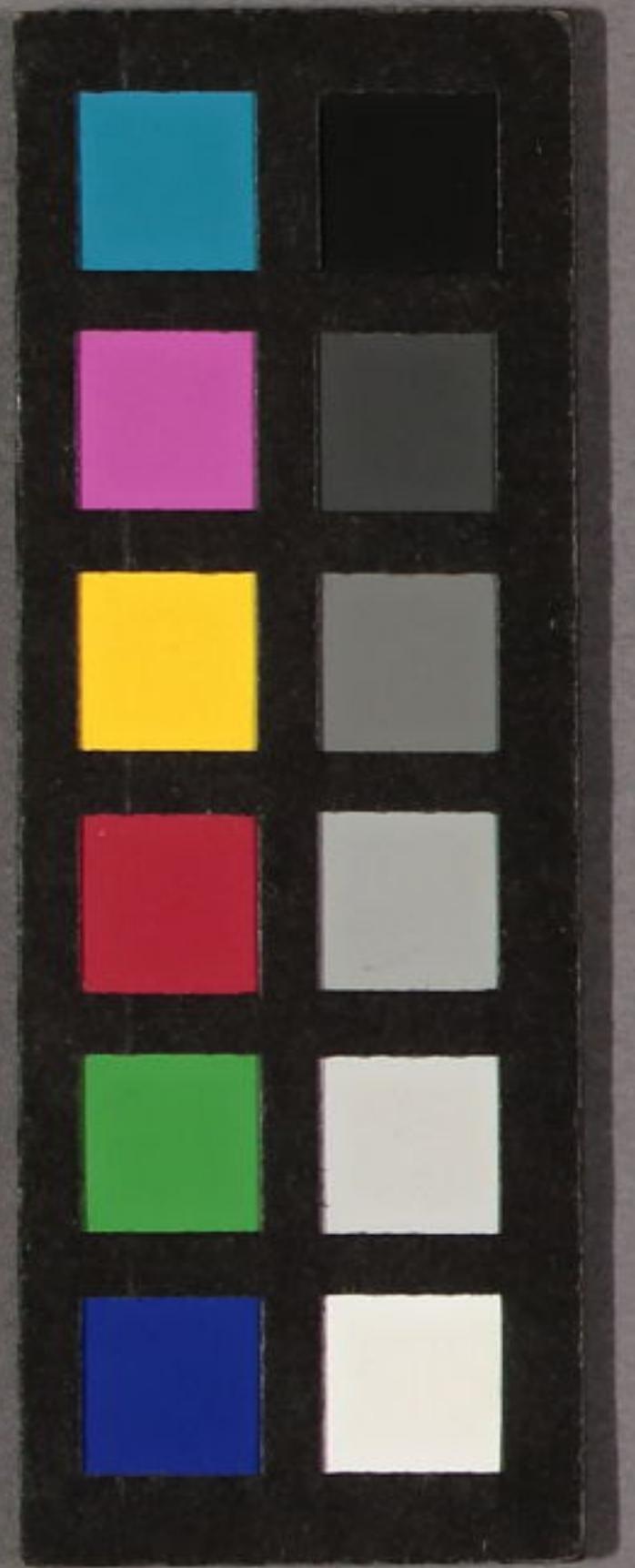


鬼
貲
獨
言



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 JAPAN

是よ能猪をもてひそむとおこさううよ」てんむわなまも
コシヒカあく奴婢僕僕のやううまで口あきうせでけり
みくまはうじひういぬれはうへにまほうをもつてひれとのと
少ゆこと其原ハ雅波津浪高山の叶すりふうやく
人倫和一人心となくもうハ陽てく和ううの徳や
かまうにや和夷ゆも能猪神とてひるれハ其中より
こうね出まふやくもんあうあれハ遠くも近くも能猪
ふるむ人の名向とて軍もん其心也すとてこそ空
又妖艶あら物とて寛ふ鬼貫と軍え」（ちま）
若うり財よりけとに力と申め能波山またやまと
あら山と入ふものがよし志つまこと成志ありはて
旅を佳境毛利年舊さまに二千石高くせよ

ありてまことに人の口ふらひ居らともハ傳ヨ一唱三歎
子絶もよんげへ争ひん玉こめハ絶唱の用ひと観
一き門人ゆどゆよみてニ帖よ書あつて牠云とあん
名前はくさりとまくふもへも厚うなき教とあると見是
至寶の物とらゆされば而するを念と書の跡せうじに
庵さかへや絶へと我またくちうぬ歴せ承れしりう
ほの泥ぬいさうへと固辞一帰るねうあう様ふ
そもるりあうちに中元お詫び道へをすまむあく
筆よはきつや仕ぬか

以敬麻長伯誌

俳諧のうちハ行はせば^サ深く安きよがて侍ア
かをす一初の時はハ涉きようやうよ入をり
強ハ除きよりわざきふ出をり聞こむ一ハぐく心
する想うて初中後を絶へと今ハモロリす
今をふすく一心皆さびふりきしていつくらりゆ
さぬ上身にはあはり^サ是をかくふは絶唱ハ其處
の化口よ^サ根力あきしひ控茶なありこう歌を事
おもてをすまへ是の梅の和音の一種とう安時も
かくみ度む聲かく風せうせハ行くを不しむむ
よ侍

此處もまた中立せしむをよせて御りす
たゞハ居まつての報ふいをくわへゆ時脚くき
心の足らず河へ觀と云ふ前句す子母こぼで宿立しゆり
旅を仕向むけむて取ふを「て又侍」
全のりあり
やう一又お杖のよんたをうれめふ心かくら
とくあきじ面おもてさけまへ家よもじて物ものあゆ
あゆるかふく庵あんを移うつかれて起れて春はるよもとうき
行ゆふんよつうあるの廟廟もうよひたあがれて用もち
う一御ごなすふとも仕らふ取とりてそれを改
或も他人の事ことと云ふ皆是ぜかとんのああああととうず
常つねの業わざと紀待きまつみあそび「紀待きまつ」を又常つねのむつま
き事ことは萬まんより自然しぜんと匂におふも覺おぼ

物語

ことをやうのうと作つくて手てを新あたらしと思おもふ人ひと
此道を深ふかく尋たず見みされハ遠とほき境さかい小入こいりくや住すん
宿しゆ八や十じ日ひを用もちひ心こころを新あたらしと用もちひとて中なか身み
一度いちどあ面白おもしろきうニシにしきもははききさんさんはそれよも
仕つかまよようある残のこせんと大おほかさんハ二ふた入りりを今いま
萬まん小入こいりとと紀待きまつみ萬まんあうちも候まわく夕ゆふ其その
事ことかくくや待まつんまつととやりあうあうたる源みなハ更さら
能のくもかあぬぬ「紀待きまつ」にやうららはまほほくのとす
所ところに

朧うき月つき雪ゆき花はなああい艸くさ其その生なま原はらももたとえ

まで行かむほきしとく おおひもとくしる
までも我事をしひをより一ぬものうゑとゆく
候ひなんじ云葉よ行せふハ内とすくあくやゆく
体のうり引くをやへ一みそく一家祖法乃
新禮めも上よりは付らば他人の中よがくやまく
ハ新法の中行まうこそといひ既ひ是とそ
白を仰るにすと祠とのまよすれハ内ともくす
只心を深く入て波葉云葉よかうにとそこの内見れ
古事記かく事しやもあれどもく寧拘て
久を以ることをつうとせう、ぬれと用ふとの境
あくへくうち西の形母おくせせて仕方多く
御身のゆき流はその形をとむる天性をとく

得て心腹とぞ申すまづ一見れ

或人の角り能階をあくぬとぞ知りゆくと元と
かとはまゆてゆる所ハ天性教えつけぬふんを
そくくるべ凡四十年六あすりてりすも廢とむ
走とくするべく仰時ハ抱のほどりふ視をとく
おおせすよおふあれと道のうを詠とせふん
御身とすくよけう平生深くんをもつてせざる
のあくぬとぞ知り額よしゆかアヤシムハ能
能階をするべく行すよもひこませばたか得く
うかよ止まむか年々よあいをめそ佑る年時分も
あくやもやうに是とみ或時ハ利くすくあくか
くとありゆく事と成つてゐりぬア深く

入をん人を暮程 よ切つもりておもつがせ事を
是をゆくにゆけりの通り假よをうちゆくゆけりて
止まむ奥おくもあらしと、ゆけりの下までゆけりと
ゆけりたゞハ家格法いえハ連つづ親おやの遠とほ人ひとよて
傳つたへすちくちく人ひともなしとハソト、被かぶる者ものの上
に今五年ごひんとせみ候まわは五年ごひんの切き十じとせあらうくなま
り十年じゅうねんの切きもねあらうゆかうそ

新しんへ化かりたゞハやうて古いのちを角くずくとこ
」もくふ古いのちを角くずくもだうゆをとせ
能のうらとハ足あしをゆくや化か意いすのゆめくりてしもとと
脚あしとを深ふかく舞まいひくうの姿しきをかうゆとお
まわるを

歳と且よの跡あとの只ただの者のうりゆえヌえりやとさく
レフハえりのうことのうおもひて心こころのとばとばもあら
タモタモの匂におい花はなのうをしひ日ひの向むかハ月つきのとひじて
あうも意味深ひみつまをとくとくハう室むろすあらん
匂においのちうなまにまさせて色いろの事ことを
取とまとおめひとせて自じうそよ作つくまくつづけ
を薄うすまと減へをのみひのゆくとちうをとてあ
はれひはもううらみをまつたれとふもまた
歎たんを化かりとゆ細ほそエのうよてゆけり聲こゑをゆく
人の鳥とり海うみのうよ力ぢをとまとましてしもす所ところ年とし
うけりなまをとせおううくはままとふし
候まわくはれ是これ是これをしたのはや能のうやせの意いを

海に思ひ入るゝ故あるべし

嘗ての絶賛はあら幾日の久しうこと前廻母
安室にて詠吟は刻月一と再び是すはも居り
されば歌もしてさすり當日よりうて或ち
歌題居たりむ一すりとも附夜半も歌てゆり
又庵邊で集うぬふたうて歌わき一と後居る
程かうちぬ今時の絶賛は再びをあふゆする
稀あり見るハ度の上の句歌がおやくはれと病の
ひみの席の三から一めからくに古人ハ若眠息
してをう毎よ家並せんと因ひ室色ハ又故をき
タとえどもゆき一或ひちうふか便をくまへらふ
のうかうをやつふ業一作りは其がもううう時つ様

たまをうそ

作意といひ立あらくへんをきくの耳よりもおもづ
とや木石えい竹へ又おもづき木のやまじことを
修一竹へ幽きのうを拂りふきんう耳一木へ聲な
らきよもがよもがよもがよもうそ一あうも其詞やき
水ハレタ、誰もあへまとうそ一よめぞりゆく
耳えぬといふよ出云と不首尾のたまつ作り
まこと残年へ友人のさけ一ゆきと作りて是かても
いすあゆえ邊てねも一紙うりとを全ゆきうり
相をぬきて後よ何のゆきもゆえぬうなう仕事
を作意ハ初念せ通向をふみつけあれ作りゆ
ゑのこれうやゆうにゆきてしむじふじよもかく後

ソモニス幽玄の如ひたまきんをもて其意味の西
白文所を中えぬる

新稿の御詒與りてしらつゆふ白のソモニ
おもよしとひうてお詒焉よかあく風支々毎小稿を
そぞまくさん人の如き 男ひじつ風をもよひだりに
もよひなきわざにてほの御影うりゆ度よきて、
名其日の御主ことんを改毛又御影のかくたる
席よハ心のうちに御詒やて右の如く情じんがう
ちうをさらもせぬ

追善懐因の御詒がまとまとひま時ハ二承も佛の
三ち小宵せ仕さん

花つるは一束の室也又ハ即老よゆづて智

こすも廻らに貴人小人有とみちる花を不營」
是れはすまことに宗西の御詒を仰こもてかより
會終すへまことよりはもうとく内省時もつむひ
切あらう遠き處へつれと今財のそのこうちをも無く
レアリナ通の形をみて失ひる化おハ脚致り
「きの多くをも失ひ度なやうにさるゆき仕事
桑の葉三本とさむ化お花のうをせざるやうに
是れもまたうへく

照白ハ文字まで苗字ニハにあらず留らん苗とあ
ハ前とあはれととあはれとされ皆とがるすみす
仕事と何故かハ定められぬととふ御詒を以新
をあらん神と又組りてふとあせりこの文字ある

あらぬ事あるべからずもあらずあり候

表乃十三の國を用ひ度重表より十一のめ日十三ちめ
を花つてと定め候と又月を大よ取り候て
すと候何日つまでも候うへば月をの度
と云何故定立候うへどひかひをたゞ年へあく候
人もの

花と桜花とあさゝに西花はあゝ秋ハ滿て日本ハ
いふやも乃ハナヒアリハ何を生て花とへきひをん
やと深く尋ね候さる由こそ豫食右大將西行
上人ヨリ馬の道を尋ね候なり時馬ハ大江の千里、
月されハ濃雲のすとみて氣あふと着られ候ハ而と
拍子をひねりて即ち身をすゑあふことをぞとひむ

「さよとく続書より句の詠拍子ハ止むりあくせきに
あうとおもひりゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
しゆくと古人の御もとへはりをすり拂りすく
まうかく

桑々よ勤くとつぶ事作たとへハつもなうとす
のゆうてしのそゆすむけり杜若の夕をりやえのゆ
てこれハなまをすそせらかんもあ残す生れ作る人も
飽嘗ふてふとしおみひかひうまち賣新茶をすも
同是歌盡せらんと能縁をはとひうみる事と
益とふむせらんと深く尋ねてあくゆもあくゆ出る
玉ゆきせてしひあくさもわざととおうりとおもひ
とあくひまくはけるを毎へきたる故にて候はせると

あらん仰宿までしやとくうそつきよゑをあらん
又仰宿こうとうに「あてせは」もんのう
衣宿ふ興さむる移せ模ねをそえヌ羽織もかね
の上小甲う立鷦帽子なんとと居て人牛へ出よと
いそく出でまや能あらくちよ「おま仰宿へ和歌
のものあれハ心を種ひて万のとの葉と御目よ
見えぬ鬼神をあわめとおもせ極き武士とも
なくけしもみちとて、中う仰宿正修てあり
道をりひげふあさけあくぬんまう情をうら
え不孝不忠の人も不の字をく面一只是す事
てさもく所を前々ふきておどり、付うか取な
きておう、まく前うと付うと肌もあひだす

あらんをよせ是をよやの道すあらんとたまみ
改むきるよ哉
人よこれうたひよ詞をうよ仰れハ慈く能
諸くと年へあらまく人ハ付う味ひをりあらま
がるう

古風もむうふあらんとあは
一きらもううり古風とすうほん古風といわも當
ゆとすりともに経のためたうちのすうよすりす新
古のうへあれと仰りて誠のとと行き人の向ち
銀よせ便とも新古の良あはあー只け通す原
く心を入れかん人のまれあるとせあゆくそれ仰宿
のまくちよアキラ人の雪に連れてタムル事も

勇てこゝらへ思ひの向ともてつまざめたまひ古文體
刀を入さうめ又馬トシマも出でりくさ／深
き／人の方ふん匂ひてどり／只ひおとふ筋而
のうちすり表見トシマて前かかすうりて出でる全
程よ／くよれりてつぢかトシマはふうの道よふきもん
のうち袋とやくふあも到トシマまくよ秀逸の巻ト
じるハアうちすく所トシマ行トシマすおもうちせんすも
えとほ馬トシマするにこむすよて其意陳トシマく
連トシマ御トシマたとてゑいひゆき是トシマがちふ徳を巧ニよせ
てよろとのこ面白きゆふ是トシマても抱かん人の事トシマ
仰トシマよあくまに世トシマは圓く人のゆるトシマたむ徳トシマの秀
逸トシマと孝トシマと義トシマと忠トシマと勇トシマと
誠トシマと孝トシマと義トシマと忠トシマと勇トシマと誠トシマ

モラク
あくや 疑ひをおこして極トシマ入て又仕トシマんを上よ
色トシマ自トシマふ衣トシマをもあトシマくそトシマト小細トシマよトシマと
四トシマすすて承トシマて而トシマてと徳トシマおハ強トシマ人の力トシマ秀
逸トシマを強トシマて一トシマのめトシマもあトシマくすトシマかトシマし
此道トシマ修トシマ得トシマ人トシマ六トシマ前時代トシマのう代トシマてトシマせよ
やトシマもひトシマそ利トシマよ向トシマの姿トシマをひあトシマす事トシマやモテる事トシマ
あトシマてとやうのう形トシマ更トシマひゆもきよ小作トシマんすくて細
言トシマよこまう所トシマもうきよかトシマん准トシマことをあく
おトシマひひてとめひに時トシマうまれひ身トシマとあくトシマえ
たんトシマのうとくめああに一トシマ枚トシマに松岭トシマの艶
音トシマなとくに自トシマ志トシマとひびりて元氣トシマよ體トシマとくわ
本筋トシマのくやけ所トシマとてきうせよとしもとま筋トシマても

及まくや何ん一筋よこりかたす。とお假名の松
の内へあらう。地はりて松すわうんうもかちか原
しまやくゆ所をめつゝしめくらべしもやそく求
めまくやハレいかく。其所は心とは事はりて地を
あくせりす。レヒヤすま是とてレヒニヤ。かを
を逃れり。かくあはまする人ほほこぬべき
至徳也。

管轄を管轄の陸と軍用とあり。う教訓を正
管の轉りをだすと。海とにハ付色範囲の附りあくて
心より止める能がいたと。もたかとく。上は光る
四方山を詠えど。人の心より。とうちれきうと
しつひを算て。こそもさわす風景を見とて。居候

其新をいたらん。とこめうめ。とづ階と
の石と。といふか高と所よびて此理と
あく年へ仕うて。未練の人へもたまうせりす。もと
少ア侍る未練す。てこれこそ。熟と。思ひ人へ
愚をそむける。ほの見方あくて。上もよあく。ぶ
理をちと。あと我うんをさして。だやせり。と
あらぬ。被りあま人の筋用。一色すてぬる筋を
もくと。みちがえやえをもて。至る筋を過む行
御諧乃能り。といふハ。とす。向ふゆとよ事ひと
被古。て平生。人の事。をもそく。その事と。根用
ひて。いつもうなさる。ともと。いねと。んをア。せ
いあ。也。

多、袖襷仕事してす。」
セウを承りと持と
うみてそれの所持りゆくより、人にはあまむらん
脂との通ふゆをさせも」てうの上をひめとある
ひくはれおはたとひ袋とせをぬとも身の着とは
あはれ也。」

御階下地自向肩り句格がとあるゆ地とじて
さの面白さゆふもかうに一て前をもむと通
うをつて自うとへとうのゆくせとてゆうり
修あらるるるえー遣うき其あをり能をうつ
き節^たん上^し又ちう一文前を少^{すこ}けうをとて所をかう
くとつまく修さん格がといふ打きこゆ不^ふ可^可
前をよけまくきうすむ神と度よてよく付修うて

あら感満をといふなる也。」

百額の内、地三十三遣、白三十三、自向十七格外十七
と古人の云ひ是ハ何あうちの役をそぞくよ志わゆ
すとつまく行^ゆは百額皆付方一枚ある時付した地

あんといふこと御あらく

連兜のわづれハ遠て又多く付ハ遠く廻くアモ貰
肴を拿すうと一色とくへ東西にこうた行人の一
歩ある時、袖をなく^レ福をぬま^レぬやとあへ見ん
西ゆうんと志のちうひと可^レうわうとくいふ安
らうめ、兜云のつよがん匂ハ一步よりあうと
引く人の遠をさうひと隔るたくひあ^レ又
玄紫やもくみでおせとゆふ所ハ連^シ青色

たちうちもこころには行運のいきさうをあらへたまふ
全く他譜あるべし是より脊中全體である人の東西
へりふれどくもくじや或又書き音ふらは傳と云葉
つみともて他譜やといふとくひりゑぬへるる
少ぞ能むとかく其らをととめて傳せんと又
繁よもひへきりありありと他譜ハ連音をえと
あて連歌を起るべしと古人の詞も又作れ乳
はすねうよハだらうり大かきよと書く他云うち
よつひての形いうえく術或き文字を書ふて
いかをくひのこつねぬくと是を傳ふ傳也
たとこかざりなほ人の宣究へる時をさぬさか
が勇士に似き事とて座意子死へき酒ともあく

かく唯人づかば支松を歌ふれハ死ぬせき場ふぢよ
ひて近る支連をあらう如一又ぬこと我深くたま
ひて落葉葉面あわゆ仕立たまをよハせらちうとしる
かくは行連ひふゆ即一やたとハ物と色一を原
今より色してこれよハあゆまちあきゆやの詞を
正にてやまくうみひはる時ハよハアシレやうにえずれを
やもみゆふねさるせなうてと一鳥もたまにて死を
きハむもうこと一病とすくれからしをよハだらとひ
まこと深め口ひ入を活きしとハシムトア
やを虚實をも無くもと向と號詞のみがうりて
強弱せば一先の人は熟やてひとよだりやまん
をもすすめ

古文の御書院は百日間の稽古古より一日の座切としひて
其角を出でんと哉太切か只ひ便り無くよ
水色居所の御用事ハタゞけしさうを付方考
合ふ輪也、御はえもがの詮義までくづくは
古文の御書院は百日間の稽古古より一日の座切としひて
其角を出でんと哉太切か只ひ便り無くよ
水色居所の御用事ハタゞけしさうを付方考
合ふ輪也、御はえもがの詮義までくづくは

古の御詫仰の百日祝古より一日の往來切とひて
其會せ出あんと哉大切ふ思ひ候ト一毎より新
水色也居所の御用事ハウセシテ仕方せし
合ふ輪也。内はもろがの詮義までくりくはせ
一ロ段度切り大切の事みて候
詮を深めかひひて言はるゝあるも御上う
かえれども、詮よどよく意ノたゞんとお
ぬも所よハ侍め詮もなをよ仕立たんと考
て一聲ふ口を重ねば御言たくまにかくして御
音の詮すうち終まへあれ

家長法師の難波母体の鳥居小屋にて
うちまちかどりぬぢにあつたと八連の塔を引却て

見事に敵をかきこておもてなし絶頂す
其如く折殘をのめん前む心を於ハ茎より茎を切る
事無れし梅綠諸をひく（寄合をあさぎりとて
名付、さきほどの如く）三拵諸も又ともに伝す

卷之三

古風書の書を写りて其の長短句と
機知の句（送り句）其の長短句と
小籠舟の事あつて加へて下を今、かんの船
まことに此下を入へりとておれども、
大鳥弓のまゝかくよ一矢をすゝ
けらを二矢つゝて空とての心を細ひて後悔す
書はせば、今ハはるかの心うごくて空め有

何よりもあくて直ふ出付まへ一仕はれまほは流外
の事よりなりあらうとひぬことをうからく侍ふ
古ハ多和あるとし物をもて付くるハ古事よりも古事
事でも様よきん達役をさうり付すと仕事も事も
此出ふ人えさるけとひとねにう焉處陽日梅元氣母跡
室の金ふ出て

ちよとそとそと近きめ處吉野山

とゆふきよ

舞す舞をさゆす蝶尾

云はゆうされハ吉野のふく庵其故ゐるやうと
仰のとくゆみあひてあやか一すの仰前とよしと
久前と遙く往々間付くやうづく其往付と

(さゆ
とよしと
久前)

ひととありたゞちたらとひ行

もとまもとやさむ移ふ草木のゆをひぢ
と一座の人のおりふる而も獨自あくて

足す一葉の花の聲うとろかとひて

ゆじぬ古事よすうて付ゆうことあるの化意をもて
此禮を極て若者せばハめつゝは是ハ以てよふ
古事よやと尋ねられはたゞ方事あつて
人ゆとりし定めはやうて能事に書せられしはうるゆり
師の心をかためかく仕事能をもてもたひもくも懷持
をゆかゞも仕事も其う能事と只のう仕事す
おそれこそ仕事其う能事と只のう仕事す
思ひもうちのうあらむと一かく出でたる量

のあらやまちも侍

え縁十七年のまきたる程の始末或は人のもの
りきらふ底の母父の像をうけて奉ら所せざれ
一時折節をうながすてこと色降をゆ中丹
籬の梅は志高く豊てそぞろわからむと詔を見え
侍にれハ

雨雪は梅を見ても空氣

このうちとつあまつまぬ彼是萬めく一室中
よと蠟通の聲をひび出でよき紅葉をたりや
て元よりあん仕立とくわく仕事者限をも無く
さとうと心ゆればかりあやまつあらをも仕出
侍りぬまでもううきを紫入る時よに廻而乃

うかこなるハ日寒玉雨を博くんと立ちてやうもんに
作り候る大丈の人の歩みてゆる其時今一々一返
してくわくうちに吟味みてさす手すり

ソシく身武家船連三才小計て能谱を興
貞徳立園又中興してやくせしにせしちをもろひ
あふれども其詞をく或はんまやうやくして初學の
人の入かるたれをおもひよりてこそ後梅翁高風を
作てうへく其句の次第花やうにおくにりさくと
人皆多く古風を捨て其高風をすくとぞとく彼古風を
それよりあた向よ梅翁がこうていつく彼古風を
うまい仕事其いすくをあらまへば次第よせ成
さうしては底の移りかき一まよう学ひたる

老ニシテアリトキアリサレハ法ガアリトモキテテヨリ
ス就ケリキと思ひる仕侍も古事記はくらま
内みりて古ノモノをも并へさせたくひめ見え
候只々ナシアリ松ナラニシテウラタシヌとも古柏
を草取ありて木の底ニシテシル柏也ハカノ門ウラ
法ウリセはかくハあ師ニシテシル柏也ハカノ門ウラ
某ハ歳ニテ國を處にしあけ御奉祭ナリニタニテ
十三歳のじねに維舟は師のうあせともすして安
翁の右筋を学ひ其道ふ心をアマ新種ナリ百
負をうなま其ヒタヨ立る古ものう翁ハミタニテ
志をこのことくもろいこぎとシノ歎をアツヒ
かくて十五歳のじね梅ニシテ入の花流つ花也

余心移リ又其翰也をいひ難むれをりとも
ニテ仕事もみを能く文字をくに叶ハ寓云異
秋さぬりひちくせしに奉白ふよしに人よす
リこれか心ナリをも一ちうりしゆにみけもを
も御リ一仕事もかくてかに所よだりくまで
か庵きやうハドリニシテキモニシキ、心ナリ難
もおこてハ更よふよそもるすをく只もす
ちよりの仰猪ハズあく一から姿多くハセナリテ
少ハ包みを替るのとよて心拂つりよる者と
ソラをもるよ御手折りかく深子をもかまた
是モリとどうくふやてあつも其心深古より
飽諦の卷々を以もかず

ま柳の生あうくゆるのもみうゑ
まん丸ひ出れどあうきまは日を
うばふへてかと處事へりやるのくほ
山伏ちるふくとうゑきにさん柳

又甚だ尚ほとす年えり

柳やある紅葉葉すやうり鹿うし

是等は彼家被法城の役が非通教通財正道
進正道といひともいはぬたる純治ハ根白根
意をいふとのいわゆるハウリ一葉すかをとくさ
わゆる所除き葉もやうじんと延宝九年の
比より骨體ときて物それらはそももすとく
居とことをせ成破て貞享二年の春油とりのみ

佩緒あらう思ひもうきりすすり其うまくもむる
もつうの折も急くうせてそれちこか室音と
すりぬ候。将ら人の物語りを移して未熟の
人手ひて承あう教ふいづる才力あきんハ其望
伝て實業へことたもふをうちこてる車ハ根ま
のままで修みぬてひきこもと御り一往之を
を終念もこしたる芳をもつしゆさてて只口先をと
もて上をすくまくよおもはさんすとこゝもんと
附せられ

當時もとをやく佩緒の申はくを申てご猪の体を
前うれ何とすよと向人られハ今前うを尋ねま
ねもああうへば。當心へあらなんとふかへる

此をよりよくおとむねりけ母中申す
某は談林風に伊丹源左としひて句ふ様
をもせし時節より前に前句を志する事く或
多喜とけうとくらまつたる句も仕合とニラ陽
て授を守くにと云ふやあり

古ハ二度百韻の解説をも句毎よせて承り
今度は或ハ急く書焉と一例今當是こと
以て主に私入をなすもの石田さん御二重を思ふよ
以てハ緑語をつきて付言れハ引足ひ出せ
ぞりく仕り一今ハ前句も緑語ふさるを詮を
差えて仰り立たる句よりて仕組ハ行とくにて足ひ出
支種も叶へ一元と小前句ふつうさる皆なし

親儀の聲からハ其ことふきをのべゆてさうみヶ音
地くらのもの抱をぬしうに付くハ只のものと抱
玉能く心をまとめてす角一曰季を行なふハ唯よ
一とよこんゆてたゞハ正月の句が三月の物とつけ
冒のゆふ六日の物をもて付言あわと仕
付言ハよし心をまとめて時節お速なよ極
すべきゆきやうなる「意の詞をたゞ意の口に
とおもひて和情が取向むおとく空乞は付言よ
えきうちもくはまとも心の原うしてこうむすまう
仕合あはば付言や緑語の修りもあぐんのときく
ますりて此句を仕合してううてひうるやもあ
侍

昌黎先生集 郭公はまち便て丁寧詮を教へられ其が
四季折の事と本生類かどると云ひて云々物と
ぞくでくさく所詮を年々もとて向ふもおよほ
ぬ角を車ふや。後日嘗候付たる郭公はいへ
樹はたゞ余はうなづよいひくて前もかすも云
や物の所詮を毎一通りたゞこそか一の事す
庵にれ

春の夕ハ金色もととて縦のちてわ昌了の筆也
易乃夕ハ灯を遠くに重て詠降
秋の夕ハ窓より新月海より昇り
冬の夕ハ元とむのやゑあこすり宿を写す
こそうー

春の夕ハ物と見て脚
夕立ハ身をれて涼
五更雨を待ととけ毛
牋のあを底すり脚
冬の雨もとふさひ
東練の人の俳諧を主席のと五文は言ひて
時あるある出でとつてハ鳩のと付替へ付うて
ことひかずせうてを能

かと立つて家行へと去る年今年比てや期に
比多め寄りや花やうに綴る所よ後も立てぬところも
せうる段めうへた旅ひ初て宿よかんをとしま
ひくうをうりよもすく門まハ松立す庵砂う
ちまねてとゆきしひまほ人の往來も二日三日と
常は牛馬せかよひわあくてうりかりだハ庵がま
とにくとさへてお宿らるんとおもふもせう
かに梅の折のま水の歸りおまれん地もまゐまふ
水う多む一桶の香ひあすこに使ひ入てやくとも更
きゆうきの比ハ松野寺も火をとひて人の火をう
そぢゑハ加く山里の折りけ垣やくあもむや
室屋をうつて後人のまちよひて見ひすりけん寢

ひなうるをまことにまつて浮出る事のこころアテ
まちあられ

嘗ハ声めうへき終より隣子は移る日新ものと
やうにおふえまむる今日野山もとまき立てこち
たま水も自らなまくは前もたによくほせもとま
寝よつひをよおすぬれヌうち葉うねは體のひる
むもく

蝶をあひて度みて呪をめどりよ出てあらふ
あらむだれよ旅みだく古今の室あつうく或ハ
東ももうしゆゆかく春の花ははくよ藤紫
アリたあらふ

柳を曉よりもあ残風晴天衣行り水よもれて

はすあさひあらわさをかく身を立あうて休ふ
全と蘆ひ牋へ一擧の水ようりみて風よだれと參
時あやめあらうく雪すな詠ゆ

梅を初をより人の心もうれしりて歌ひくれ今
くれこでうこ嘆も残る故お節ももたぬ梅
子ねすとひと菊りをすみに雨はもうたて
こうくて裏もまよなりあはぢつとせう古巣
を見うれハヌカミ妻をたのももさう御或を山
桜まよあくれの庭桜百うよ秀て古今物への
絶雅の中うたに

抱りをも梅よりよく歌てにこやうく
梨のそよきこそうり面白——

は——藤山吹平をが名をもてる物古祝ふをうり
古文祝ふもたれて只柳も——歌とよこ大うてよすて
なうむと人多く庭より詠る人々とふる家事半
石をも庵にてまとおのゆも——歌支所り入て
其感より出さん春からむをいき意味と無事す
ゆくやむく
野もうくもくとつねて下若葉揚比すり草よ
あハゆれ出て茎つまふにまたよきて歌つ
印日初日へ横くはた夜の袖すりけ入てす
おも歌くえんちと子ハづりて歌すりう
くうと上さみのうすいもうりてもいひう
郭うり比ハ後も皆白ふんを玉て色ふあこられ

雨るをと稀やもゆうぬおかきも
うちじやゆくんぬもやゆつんと雑誌を
うもスたまきり年つる漁船をくばく
人の家よりえもて出るをもいわるふをよこひ
送りあへとゆう

ぬみすはほくふうはそー^一
苔葉をもけるやうにてほくー、
年のものけひとせよくある月と見て写
をとまき二重もとてきうに
花檻をほりーくをもろともえにひのう
ちにあうきも深

管ハ元と川ゆうゑと而ておとねとぢり

草むしり畠田の東よ躬さー入て草とつる柳の蘆
蟬を日づよれほせと音とくそとに筆景
又山吹すぢや一枯れ都、名川よ歎くもす
蓮の花ハ故の孫毛とおひたねよ、屋敷又涼
タヒムハん院ひ此を佛のとのよんうほりてアレ
さうサクアリ行てちりきのもの珍兒もどうぞ
物あくく賞すて觀念のあよ心をハ埋きたる
佛性経よあれ心の泥をも出前風ー
遠ハ閑阿の堂花頂山の山門四條丸の扇、心
都りてさらかえり田舎ハ鶴をんとめよ屋敷
延えてもものもこす

秋立霜ち山のまゝ雲のたゞをまひ木葉すり

海りにのるをも昨日よりはあせ
るにばらうておつづきの動くあると
セタの日ハたれもとく起てあとくともるよ
或ハち哉をあくへ或ハもむき一奇を吟てあよ
んをおとへあれハ又余作となし酒はとま
ぬと舟はねひてらすよあれんとあ
相の葉をやまとしてられをつくるさよいつきの
あうもあや一日のためみハ日比賣宿定め
もそれやうよ見ゆ

朝鳥をすとつあ三世のことわざをもとへ見るなき
けあくぬんまこと佛は向ふんをおこさせハあほめ
ううをすて聲ものんをやいまた

翁のちううち跡をもひかでかひくとをもあすて
今にとよみてふ落吹はよををどひかをぬく
月は伏をもすも又花もやうてなんとくにの尼
情アそひあにおりて先輩を多く人の手本あら
せうみまへ候

翁ハもうとよりぬよもをうこくアセドくらゐ
前席を引のももとおもの中よもと立てか
ちくにかにかこうにとふきんはあせんを
は仕をうくへ心をひくはに情をうへは只人の
ほとよとゆう歎へ一翁の立えう承をりやん
今時間ま川いのちのがもあへといひあら
うちの心さへかと思ひへあん社あかに見れ

女郎多は浪士かよ承もれハナの心も行ひしよ
せども走り「んとう」三絃ハラシサカ「
たゞハすけあき女の情深き如ヌ雨の夜
ねや思ふとこの影モテうるふき或ハ心よみて
く移りゆくとたまきをば恨みふれり
中えの日の蓮葉に船をもり鮒とひしあそ
船さ入る生身才をとぬき観もぬ家ア
葦庵屋敷み水うちそとたうとのみ塘を思ひ
出て千この悔やまちを悔或ハよう川のあこを
あもしておわひやる

次ツタハ心をもて靈巣ももう御山は大文字
妙法乐やうの物やをぞよほほとある

今もうき立候ゆかきうちうりて跡あく渋
もスもう歌
蹕を形より心をねつせ心より形をまよふ童の
足よまよまき園たどる親の夜ももく付坐とひ
或ハ素少男のさまゝ立坐るけうとくもあら
歌つといたれハ旅ともあくは見立へよ立よりて
糸そとくよ語りふせそとさゝゆきなんにた
るかに都ゆかおう一或ハオもおけたりたき
女の娘子をよし取り出で姿をくわおとくせ
らるもや

金石雨志めやうかよ日暮のけとよお海
写出する屋士ノ物をれ也月の夜八月はこう

闇の秋の如きよはせかきに或ハ野山の風と
の如く、秋夜の声、つたぬくとも中をゆす
秋夜の命のけしもまた歌はばくねどく
歌もはる源にて何事こほんと人あわせ

なうとそノ原

紅葉の吹きのやまの木の枯れとひらか文
あそづけるをなむにめりて、變なれりひづち
時て枝も葉も霜にちたらす。夕日こぼらに宿
てその色とふうす。され處よ遠山をのぞみ
は身がよぬ鹿の形とて、以平らとそそぐ
其里人の國とさす。すくあまの感覚を見ひ
て見る者よ立山の行へとす。や一ぞれやうち

あうめあせをひしひをし代すつくりの神も
しつづく神よめりておのう親さく處よゑさん
そよちをしとひと紅葉あぢりてたす詠りを
のこと

鷹をとり山越て跡をくえ累の上まで
有るる方よ行ちてあがれ、又あいあい行
ゆよけとあるものありとあるの細す
。うおとうふひをとて、あう心からひやう。廣
角ありてかきちいつをりせんねそくにまろに
たとえ或ハ紅葉の拂りたとえと秋うもとと向よ
あうれ書をとひ友をとひて、悔の意をかげ
つうきて写ものか。貴さんの害をさせて有る

をもんも寧までもうけらえ又齡ひを延もあ
れども倉く白く黒くあん色とうゆるゆニシハ
老病のめでてはだ敵すもあがへ

老病のめでてはだ敵すもあがへ

葡萄の花う花うと又まうかねまち侍の花せ
もう匂ひをあら化のあらふことは はなよ徳ア嘉
を取らておれ都あらはは情敵上の花ふりとと
富う如く民家の園にあらてんもそあらう如世人
是をあらへてちすりふりふるたぬ儒一一日の行
脚を修せ一日の旅り行うまゝ中は醫局をもる人の
回繞あらへと顔は相あらふ離うてとくのそきまなむを
わうや本門人ハ嘲うめくね柏の聲りよとせて想ふ
はるをもとより年をもとよりせかへちを嘆美能事あ

れじくとくの致つもりりんと千世破風は後の人の
福をうへゆまきしむる

神奈月はまよせうゆく花を植う枝まくう
て伏をくするあれとをもううちかひびてけもまなむや
えうや夕陽もやくさく、花をすまひすてゆ
りに枕よことく本多乃面朝よそやうて五キ海の
旗をもとへ

霜ハ草木とな枯せと白えゆをよううて喰う
ト一或八年くれめる人のからをかうて脇のせお
ちうき事とぞめりあがめハ體をもよみゆくもる
室蘇をのこして形うをとも足あがめしとくヌ瓦よと
てハ鬼よあひゆきとひつらぬさぬそを

かうき事

雪ハ高氣タカヒトテ其シもすゞ降ハもあづぬ常ノ心コトハ
釣ハキハをもシキシモニモニホ白ハキシヌナリテ本ハの精
をうつシムアリシムテ後ハ日陽ハは晴ハはせシテ海シを
崖ハのほシリシトモシヒ居ハモニシルカシモシシル化
ミシムス山シマを見シ固シトテ旅ハソシのくシモヤセシモ
めシモカシシヤモ或ハ是シの人のねハトモドシリシ神シ、
の細シく立シのほシも僅シ一霧ハだシモアマシシ竹シ子シ、
もろく也シモ底シて蒸ハ籠シマ風ハに竹シ子シモ岩シ鷦シ夷シ、
あくシテ嘴ハを費シタシモヨウシモヨウシ魚シ游シ、
露ハナシも候シすシやう御ハハ傳シ又シモシシサシ、
氷シを廻シキシミシ來シ水シお面シマ前シトシうとシリシロ比シの舟シ乃
前シも近シメシ候シ、一日シ朝シモうきシ魚シのからシを處

ひくシ良シきシとあうめシ候シ、シかのシの職シをシ、シ舟シ、シ鑿シ
うけシてりシるシ、シ或ハ母シをシ扱シ人のシ菴シ、シ皆シモ言シカシ、シ船シ
はあシてシるシたシ行シ、シ通シハシ、シ柄シ、シ拵シ、シ拵シ、シ柄シ、シうシちに
りシきて柄シを拵シれシ、シもともうシうシてシ或ハ童シの瓶シ、シ
出シもシておシてシ、シたシく言シ縫シのシくシもシハ文シ後シ、シ
とシ一シ年シ、シ年シかシめシりシ、シ言シ詰シ、シ、シ厚シ巻シ、シ起シた
めシまシ、シおシんシあシこシそシみシ、シかシ水シ、シ音シ、シ智シ
ハシれシをシこシしてシ上シよシまシとシ、シ此シ例シハシ千シせシ多シ代シも
浦シ、シ浦シ、シあシめシてシ、シさシ水シ、シすシ

千鳥シマの森シ、シ仲シ、シよシ舟シ、シ中シ旅シ人シ立シ、シ
遂シ、シもシ、シ、シ海シの花シ、シ老シ、シ、シ人シの、シいシまシうシ水シ、シすシ、シ
耳シ、シかシよシ、シ、シ、シ此シ例シハシ千シせシ多シ代シも

きりあらわしにゆきもんテモ古てハかの桑生
の冬うねをうこトか茂うこのつゝの川筋みハ波たゝ声
は流れてと竹人の歌ひをほしとある事もあらむる者
のうちよアキモアシヌオのモウ歌さすより移りや
すく里谷山の寺佛のあらは是あんと波毎ふる人の
心を折るうれびのねどもあく火ハ炉色よ
春をぬね宿せり寢は寝のあんなき事と恨と愁
雨中圍の中よハ朝わすうト灰あくせこまでや
をちの庭をさか一或ハカツム指を觸ひても
笛をうりてより鐘の響ひをめぐらめく夜
さにさめくおと萬葉と小書をさうるよまよ
やふこかげをばそあはる又もつまく三浦原

物ハ妻子ニテヨマハたゞ火種ひれあくまくわへ
きる人の火種よとれて何を足あらんとあらう
累の初日ハ子ヲ残もたぬとふ象もゆうて阳はちをま
んふととわにわいきみて障の屋よとあきしひう
うひ書ながらむうんすをたわひて家すとあら
子孫をあくよス故のちうれ一昔日姥らとよすめ
出て門へ立さぬよと戸さぬのせめり一春ううの
名も何れとせもくせうゆる
節度にはハ以前のせよりうわ正けん実妻妹乃
じりとハアヘぬうちこそおう一見れもうちたま
て拍子よそぞ歌ひとよす物かとせうく翁をま
庵廻りはる人は間むけのあらも却ちまし音を

煙拂ひハ人の聲をあづふおもてにとて
モウ身もあくをすまことにゆかはるともれ
志望を口にせられとも見えぬ
物の出来んと
家へもう拾ひてみし地をすま

楊柳

帰寧の家とよ其日をあつてもひかすと親
じまんに引うてまわり 緒すむよもじき女の例
あり顔はやかまんと まほ家はともりてみゆるお
さなまん乃都の役は屋山に まつて花と見る
候ひてこそそのむうへ まくはりき
年の内より春至といふに引ひもおひうち
とちよきて口もほとをぬるるおひがう ぬ出るを打
ちがますてやう いふ皆生の方よ袖打風 とき

ゆき火を
さうけて打シカヤウ
かあまで同ドモ見ミぬ鬼モモひて互アハ打タフる
つうやうが虫ムカシせみをいはくすもうかうんと
きく又アリ虫ムカシの毛ウツラうきふる毛ウツラとひく
きく齡ノリひづるめで多タチ毛ウツラ門モンはだ毛ウツラとひく
とくよあかくよ立タケルて例アリのとゆだ一ヒ望ヒツメしひあ
して又アリあらまのゆくそてせき了タクた年ヒツメも序ヒツメ
正マサニ唐カタニすむ宝ハラ舟ボウは作ハサウせし船ボウをあら
眼マツメのうちといたうけに

の事あるのによろしくあれ、もうちりへりあ
てもてねどもそもせどもをも年へてひとと
娘の肩もひりくまむけりふうともうまいり
まう足踏みゆきをうるそと暮ひぢらり
をもくまくいづのこちりあんとてはうつを
たうすもけじく家によね木柱あく
志め強さうつきて例の角にかきうたるあ
事ひそりまゆりもうきもうて考るおそやか
むつまきわきうへ大喜びのとゆきひりがりく
又おけら求む後神の名は神也神も實あ
まえうけの事ももれよ仕りをひだ
みたねの奥アキもくは見えそもれよたゞと窓

身を毎年大徳ひきうていざらもて御のまへ行そ
の富魯を能くそあんとあくらの往來外よやく絕
くよ間のとよよ枕うちからぬをあくて春秋
の竹生とたむらくつてみゆきとさりゆり竹と
かまくわく名稱をえむれ御神　御神の神さまと
重ね置ある夜のあらわやうあらわやそともせうて
身をあうりる様

卷之三

門出たる日行人ともまほせりさてぬ
まくはアラニシテ
アリスミトアリ
ナシナシナシナシ
のちあくとおわせんけとアモアリなれ

里の木立六絆よぬうせて松とうぐい疎焉とす乃
八重にかきありてへめなれ山も埋めれんるる
あと只かはうてこそ悲れされまし徳多の帶うす
物なうづく或は遠ゆむちうどアをむちをも
雲う花うともとをも裏ハ時ちの一声は其の行
拂をあさし或ハ本陰玉立やもひてハ行ゆる
コ被をあくさめ清水质も石のよき心をすし
めて時を移す秋又鳥鳴矣草ふ生を
むをひて遙うり跡跡にはきと古にいづけ
ともあるくて追ぬ或ハ又夕日かぬく時ハやと通
きかくもお団つうあくて野小居もくよわむりく
遂のほと身をもととまはる遠くいひかよまく

時ちのたははまのこ家も定あくて日影あうよまお
めうてそうだものあれ雪がねつても夜のあまう
あの鶴白羽に成りこめも時ハ吉豐神社の
こゝな戎足ひ出で旗のんを麾もす
盾のけとハはまくもゆりお下うりはれとこまま
松よ夜の森景をかくもれの石と木取り言
より鐘川の森の音千鳥の音海波さ竈の
磯お浪うるゑ風の音も更てり丁うれ雨落
やうあらかの家のかくすみて錦ほむく音とよ
にやうあらかの作す大の長歌もと一車え
やうかくぬの星さく歌あさんよねはえ
行す佐常と古の便りのとおほつうあくて

人情を知りぬ所をうらむ。お節ふ事も人乃
くあらずみとて公卿たのまんと筆をとひとまた
せそはうほとすてもむじ。其心のほと暮増やも書
うかきくて物あわなやあてえよ運ハ本ぬれを
なりかひあらめてやうて又えうとり社本ゑな
き本當御してんあらある國に入てハまづふ今日
よも。一かりへり人のほよ鬼もあをひひつり
すみ付てねがゆ。逝えひすおうへき事可
れ今をんなみよ興を儀ももぢのゆのこひ
の極はれハ厭もとさわこうくそとぬスウニ
におかしきてハモヒヨー風の道くなるよまうせ
あ哉とけあきに通おそき馬やもし走る程後

主事某年月日

魚ノキ物事向ノ一聞くう事あんとぞ
日赤々是ののを立あんとぞ初ニコハ娘
それ笠立破きねうく包さ思う画被毛
麻の衣うちを向きたまふはますてそよきし
あまゆや。あこあくさんとぞしたまへつう
ハヒトヨ刀かひとぞまうち得たらう。船一き
或ハうかくん旗のびとす。前とおもひうて
のぬかくめ童僕すうこひもく稚子門よまう
しげをんぶの石とく玉アセガれをモーグ内ハ岩
くの麻荒えも旗のん母半とひぬを窓天井
より以けてハ鐵赤扇え上葉入る松をみけ
る又梅。うりをも無事日比あひたるうらやま

改時の間にさへ或はお頬を押す
事も厭はぬハ心立よんと身を
右きの方を打もせきと一隻を馬車賣
て又車を打め行つて見ゆ
跡ナリ馬車よもあくして坐了
とあはねの心アモされ

卷之三

こちらも法界より量りあるものあらず。左
邊ふ所、大方の水の終焉をめよともむかし
されば又見ぬんをあはれり。すやうにとひ
あらゆる處へたゞおもひ或は筆のうちを
ぞぞり書き。心生れひ或は芦穂の間

迎きに竹扇りのみ休ふれぬ
せうとうのあひ物に
を年て、水桶とすりて漆器とじあそをうと來めま
又通りよりぬあととも桔子すのううちすり都さう
出でるをと見ておらずとくの扇よりく
あきらかふ物の價あんと手筋でよやかうと被
家の名をとひて出来あみ或はたとくふ事ひ
あまく又神み侍。母宿めく口もき色よき女の
立坐す中みかくそめよれむひよせとハ原ある
てき便わかあと男あわく傷ある村ああ見
えりえりかわくまのやうりをもてよう或は生
纏と川物竹。牛うらはけりもすひ或は迎き
方の内を却く多くとあまがくをいたま

タリトモ経中かうり婆人のもこれも
を見て立あつたと付ましたるふ行ぬきて立
向ひたれハ婆を立経つて教訓ふ學を傳へて立
のきあらわれやー或ハ又以て教思ひみこらす身の
人あらすあり立くわまう禮のクサキアモ
行くふ道うづりてこれをおもひはあ、教あも
う經えよと教みて紙の皺有のはてをひ
やうふよとあくせーとるは紙がまよえて於を失
る身のわざえもうれーあらんよ阿まの忍び半
叶てハ仙よたのみ神かずてお祈るさる余
向ひてハ申えもいそれまでを物いませぬ、
貧と心のうちをうちゆきまわおう。

みてれりフ人あれぬ遍ひ路ゆき大きひ
じ見て霜毎小貯すハハーくおもこうり
あうゆうとしひゑん何うううてもおもひあ
詫と食ふねこ前やりて尾をぬまふ胸
つを前或へけふくせ守も物あきひあん
とほんをひそりそりつけれ被とふあ
人の例の附をもとまくともやせゆて通ふ今
宵も又びくれ立りゆくとおせ教あもとひ
吉あらん時うねうきとよとけんよかどひことくて
やけー星ああももたまかがまゆき重ね
にああまくわづりて難のほとくま立せ
むう程よその駒もすゆ比もし闇ゆく忍ひ

やうにきぬのにとあひ一死れ、てれどもと
そくらあちにいふふく／＼往ぬるやと被りり
をもうちあまひ新の村戸をさく／＼もす
身を横さまふもを免へてはませぬまふ躊躇さ
よせぬかはづてあを鳥／＼も心むよりて
う行／＼鳥とすとけれと抱うちかゝゆきて
よ打／＼遠くゑへれとぞ、都はせのほのふアミキリ
あもうひあうゆ／＼さん地をする年日はれあ
うつるんばく／＼あとう／＼こすりてからだが
うけきそ人の教めたれんとおか／＼ゆみつの
毎年うぬもうれてとりりりりりりりりりりりり
都とめうちとを教はるまハ心むとてぬ人の

うふたあんとひま／＼ハ跡れとゆは息／＼ちゆく
かよひと上見をほほとち初てよそひてをうれ
しるれ或いス近手／＼あう／＼あるやとこひて毎かな
ア／＼まふ前のタ吹とゆえ／＼より指の教た／＼心を
とよしくれうきて自らううち説くが時／＼あくた
あとととととととととととととととととととととと
あおゆやとてうな／＼うねまくわまくとととと
水をあくとてうな／＼うねまくわまくわまく
おほひあくとてうな／＼うねまくわまくわまく
めくとととととととととととととととととととと
つととととととととととととととととととととと
はまとととととととととととととととととととと

多事體の事にやまうき身うちでみじりうを
しりうちゆもむせちあけよ見たまふと皆よ
あくま草引おとくそもむかは筆離とつて色に色
てり紙くわくと急のうちふへ筆友の事あるとる
枕下てかくまあれ又筆の事あらさむれ
行うすやまんと角ね、所せせてハ山うち後
川のほとよひつゝほとて水のり事も物
ありくそこうめきたるに桂園か梅
家敷あくまも庭ます（或）フ身
ゆうり一中へによみてよんのうほりあんとあま
舟車すもほまる努力ハアトモタマキヨも
口ひきをせりあゆのかまうてふをとめのもの

東山道のうちで之を得
花

祝

そむくやまゆる物事と地りを丹よりす
天船は天の日食也すすみて天地を合乃
大たたかく御よ河と引りて神と貴之君を行ひ
世をおさめえ我おもる乃とハナリルシ事
梅うさくとすり柳の葉の疊よあくとすりやめゆ
せうせうあらぬの匂い香聞と立きて横丁すまきと
をいひとぬき一陽本りかてはなはなきの發
をまきそめ袴引張りあわんとて神よ猪せんとて
出立するをもるの故に脱ぎてつままで

る心の内うちにてたゞやく此四海浪聲なみのうせいにて構
わせきぬうちもなまれハカリ声よ是これをあす
めさはかくお向むけん處ところを深ふかくおさゆる國くにりあ
まもと民みんくさうちうる石いしひよ紀き摺こすの連つづ
一音おとをほくねむ方かたが水みずとうとくせんとくら水みずの房ふさ
の巻まきをあくぬかる時代じだいこそ河かく風かぜを

右ニ抄うりハ年比とひひ寄よどひともともう爲覺あく
かりば年とひ年とひ作つくりを行ゆくうちよじよよまで千及せんじ
市貢いちごんよ行ゆくよしよなれ

鬼貫

破

末齋

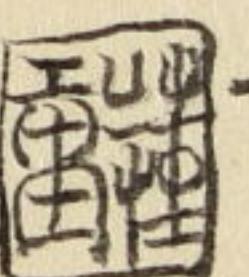
古曰詩雖まへ爲楚文辭よしトト爲唐とう律りつ也吾國わがくに和歌有あ長歌經なが歌旋せん廕ひ
歌うた、連歌つらぎ俳ひ諧かず也乃隨つれて世よ衰こ也如し如し
俳諧ひかず日本歌若論よ之別野べつの也然し甚しづ
實じ不ふ野の也今鬼貫きぬぬき諧かず諸よ並野な語ご
乃お實じ語ご也洞明とうめい詩し有あ達磨だつま骨髓こつき
別諧ひかず亦入妙めう處ところ益ます到いた古人うきみ味み

集
書

歌集境其可得乎余閱鬼貫独
言集其絕妙乃味正焉余以謂
連宗祇宗長得妙諭諸鬼貫
獨得妙玄在乎勉每

紫野巨劫子書于酒

源尚彭



古文化六年乙卯夏月平一

茶室

時明治十四年九月廿一日ヨリ始同廿七日終

椿海居在逸寫

東方の歌う手折
もううつる过うそ

追ふ口巻束の口も

すすめ我門の林

